

創学舎ニユース

No.247

「佐賀のがばいばあちゃん」

漫才師島田洋七氏の自伝的小説「佐賀のがばいばあちゃん」が映画化され九州で選考上映されている(がばい、は佐賀弁でものすごい、という意味)。洋七少年は、幼いときに佐賀の祖母の所に預けられるのだが、吉行和子さん演じるこのおばあさんが貧しいながらも大変な積極的精神の持ち主で、そこに昭和四十年代の人情深い人々が絡み合い物語は進んでいく。

客席からは、笑いが起こったかと思えば、一転してすすり泣きが聞こえてくる。年配の方も多かったので、懐かしい気持ちでいらっしやる方も多かったのだらう。

さて、映画の中にこんなシーンがあった。体育祭の朝のことである。「うめー……うめー……」という大声に目を覚ますと、ばあちゃんが鶏に向かって叫んでいる。ばあちゃんとしては晴れの日に卵焼きくらい持たせたかったわけだが、そんなに都合良く卵が産まれるわけもなく、洋七少年はいつもの日の丸弁当を持って学校に向かう。ばあちゃんは畑仕事で来ないので、教室で弁当を広げていると、担任の先生がやってきて「急に腹が痛くなつてな、すまんがお前の弁当と替えてくれんか。梅干は腹痛にきくから」といって見るからに豪勢な弁当を差し出す。少年が食べた事もない御馳走に喜んでみると、別の先生がやってきて同じことを言う。そうするとまた別の先生がやってきて……。「なんでみんな腹の痛くなつちやる」と不思議がる洋七少年。当然これは貧しい少年のことを案じた教師たちの思いやりを描いたエピソードである。

そして、私もまた思い出していた。小学校六年の運動会だった。早くに親を亡くした私は祖父と二人暮らししていた。行事のとき、祖父はいつも弁当屋で寿司を買って持ってくる。しかし私は周りに親がない家庭だということを知れるのが本当に嫌で、その朝は、家を出るときに「今日は来んでよかけん」とずいぶんひどいことを祖父に言ったのだ。映画のように、教師が厚意で弁当を作ってくれたこともあったが、それはそれで、一層みじめな気持ちになるだけで、嫌なことに変わりはなかった。だから、体育祭の午前の部が終わり、みんながレジャーシートを広げ始めると、私は校舎の中の誰もいない教室に行き、ただひたすら昼の時間が過ぎるのを待った。そのとき、世界中に私の居場所はそこになかったのだ。永遠に思える長い時間を過ごしながら、不思議と自分の不遇さについて誰かを恨むという気持ちはなかった。ただ、早く大人になって、遠い土地へ行き、

自分の事を全然知らない人々の中で、人生をやり直したいという強烈な思いが心に芽生えたのを覚えている。

随分長いあいだ封印していた思い出である。

「我が人生最悪のとき」ランキングをつければ間違いないベスト3に入る出来事だ。(つづく)

(関)

数学の力をつける

私は今数学を教える上において、過去の情けない経験が役に立っている。今回はその経験を書いてみる。

思い出すと中学生の時は、勉強はしなかった。それでも点数はある程度取れた。そして高校入試も突破してしまった。これが私の失敗の始まりだった。高校でも意識は全く変わらず、勉強は最低限しかしなかった。そのうち全教科とも理解できなくなり、高1の2学期には散々たる結果が出た。赤点教科の続出であった。その中でも少しは自信のあった数学が最も低くなっていた。ショックだった。さすがの成り行き男もあせり、勉強を始めた。特に数学の挽回には力を入れた。人に聞いたわけではないが、次の点を約束事として勉強した。まず、図を書く、そして、途中式を書く、さらに、言葉を書くことであった。これらのことに、ノートの使い方(例えば野線の使い方等)と、文字の書き

方(丁寧に書く)ということが続けていった。すると高1は何とか持ちこたえ、高2になって数学も伸び、さらに物理や化学も伸びていった。他教科にも数学で行ったことをそのまま利用した結果であった。結果的にはこれらの科目は当時の得意科目になった。

書く簡単なことだが、この中で実感として得たことがあった。それは実行した五つの約束事であった。まず、目に見えない抽象的な問題を目に見える具体的な問題に変え、考えやすくなった。問題は解く思考順序をしっかりと追うことができ、流れとして身につけることができた。は式だけでは解答の流れが途切れてしまつことがあるが、それを補って思考順序をより強固にすることができた。とは、それらの思考が整然と並んでいて、あとでもう一度その思考のあとを追いやすかった。

今書いたことは高度なレベルの問題を解くためには足りない部分も多々あり、多少考え違いをしているところもあった。しかし数学が苦手とてにかく平均程度にはなりたいたいと考えている生徒であれば十分力がつく。

私は毎年数学が苦手な生徒を個別に見ることがある。特に中3では受験も控え、足を引っ張る教科は少しでもあげなければならぬ。そこで副教材でこれらのことを考えて指導するようになっている。受験の合否もそうだが、生徒が、数

学が嫌いじゃなくなった」という言葉や「数学が少し得意になった」等の言葉を話してくれると、私は数学を教えていてよかったと本当に思うのである。(岡本)

教育「名言」の紹介(18)

人は自覚を持ち始めるにつれて、

自分が教育を受けつつある社会を吟味し始める。

出典 ジェームズ・ボールドウィン(アメリカ

カ・一九四一―一九八八)『黒人の子ども その

自己イメージ』

解説 アフリカ系アメリカ人で作家のジェー

ムズ・ボールドウィンの、一九六三年一〇月の

講演の一節。一九六三年は奴隷解放一〇〇周年

に当たり、公民権運動の高まりの中、八月には

公民権法の制定を求めるワシントン大行進に二

〇万人が集い、一月にはケネディ大統領が暗

殺されるといふ激動の年だった。教師を聴衆と

したこの講演で、彼は「危機的で革命的」な状

況の中で子ども向き合う仕事をする「責任あ

る」大人としての教師に、変革のために身を賭

すことを呼びかけている。

ボールドウィンは、教育の目的は子どもの社

会化であり、既にある社会の枠組みの中でその

永續のために行われるのが常であると指摘する。

しかし、まさにここに教育のパラドックスがあ

ると彼が指摘するのが、「人は自覚を持ち始め

るにつれて、自分が教育を受けつつある社会を吟味し始める」という点である。社会を批判的に吟味する人を真剣に育てようとする社会はほとんどなく、ただ社会のルールを守る市民を育成するのが理想とされるが、もしそれに成功したときにはその社会はすでに崩壊しかかっていると、彼は述べる。

彼が教育の課題として求めるのは、自分自身

の目で世界を吟味して判断をする力を各人に育

てることである。森羅万象について問いをもち、

その問いとともに生きることを学ぶことが、そ

の人らしさ(個性)をつくる。つまりアイデン

ティティーを獲得する道である。そして、その

ことが新しい時代を築く礎となる。

以上のことから、ボールドウィンは、教師た

ちを含め、自分を責任ある人間と考える人たちは

はだれであれ、社会を吟味し、その変革のため

に、どんな危険を冒しても身を賭して闘つこ

とを義務として負っていると主張するのである。

大人は自分をこまかし、この社会もそれほど

悪くないと思ひ込もつとする。自分を守るため

にあきらめ、進んでたまされようとせよとする。

しかし、子どもはそれはいかなない。物事の本質

をあまり深く探るのは危険だということはまだ

分かっていない子どもは、すべてを見つめ、お

互いを見つめ、彼らなりの結論を導き出す。黒

人の子どもは、両親がどんなに懸命に働いても

報われることが少ないこと、バスでは白人に席を譲らなければならないこと、自分は社会で歓迎されていないことを、学校に入る前から知っている。子どもはそれを言葉にできなくても、そしてそれがなぜかは分からなくても、自らへの抑圧の形を認識しているのである。そのような彼らが、学校でアメリカが自由と正義の国であると教わり、星条旗に毎朝忠誠を誓い、白人に貢献したときだけ黒人が登場する歴史教科書で学んだら、精神分裂になっても不思議ではないとボールドウィンは言う。

大人のように容易にだまされようとする

子どもは、世の中を新しくする存在である。自

覚が芽生えるにつれ承服できない姿で立ち現れ

る社会に対して、自らをこまかさずに、あきら

めずに立ち向かい、その変革のために闘つこと

が、教育を受けた者としての、そして子どもの

教育に携わる大人としての責任であると、彼は

教師たちに訴えたのである。

(アガトス教育研究所)

親子の関係の再開です。2005年3月号

のあと、ずっと休載しまして申し訳ありません

「頭のよさ」についてあらためて筆をすすめま

す。

親子の関係を再開です。2005年3月号

のあと、ずっと休載しまして申し訳ありません

「頭のよさ」についてあらためて筆をすすめま

す。

親子の関係を再開です。2005年3月号

のあと、ずっと休載しまして申し訳ありません

「頭のよさ」についてあらためて筆をすすめま

親子の関係(58)

(アガトス教育研究所)

創学舎ニュースの編集責任者 小林が二十年間書き続けてきた記事の中から抜粋・加筆したものです。
浅野書店・ブックス鈴木・新星堂他
全国書店で発売中。



卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、ご希望があれば、創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍していた教室までご連絡下さい。

間になりたいと願っているはず。でも頭のよさについて、きちんと定義できる人は極端に少ないと思います。とすれば「頭がいい人間になりたい」「頭のいい子になってほしい」という願いも、その実現を目指すとき、随分といびつな方法・在り方につながってしまうのではないのでしょうか。「こはひとつ」「頭の良さ」を確認してみることが必要になりそうです。

(1)「勉強ができる」これは誰でも思いつ

くことです。今まで、何千人もの生徒を見てき

た経験から、このことについて一定の条件をあ

げてみましよう。(小林)

創学舎から本が出ました

【受験生は読め!】合格のテクニックが「こはひとつ」

勉強法・精神面のケアなどについて、創学舎講師陣が書いたものです。
非売品です。希望者には無料で差し上げます。

愛の壁 お父さんお母さんあなたの

愛は子供に届いていますか

(著者 小林 憲石)

創学舎ニュースの編集責任者 小林が二十年間書き続けてきた記事の中から抜粋・加筆したものです。

浅野書店・ブックス鈴木・新星堂他

全国書店で発売中。



卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、ご希望があれば、創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍していた教室までご連絡下さい。